

ウェルカム・サンデー（2018年7月15日）

メッセージ：中村信哉

食卓の下の小犬でも

マルコの福音書7章24-30節

はじめに

月に一度の「ウェルカム・サンデー」によろこお越しくございました。私たちの教会では、毎月第三日曜日に、クリスチャンの方でもクリスチャンではない方でも歓迎する礼拝を行っています。私たちは、地域に住んでおられる一人でも多くの方に、イエス・キリストという方を知ってほしいと願っています。そのため、私が「ウェルカム・サンデー」でメッセージをする時には、イエス・キリストに出会って人生が変えられた人を紹介しています。

1. 人々から隠れるイエス

今日ご紹介したいのは、「シリア・フェニキヤ生まれ」の「ギリシア人」の女性です。イエス・キリストはユダヤ人でした。イエス・キリストにとってこの女性は、異邦人です。イエス・キリストは当時、ユダヤ人の病人や困っている人を助けたり、ユダヤ人たちを集めて聖書を教えたりしていました。イエス・キリストの活動の対象は、ユダヤ人でした。

しかしイエス・キリストは、24節にあるように、ある時「**ツロの地方へ行かれた**」のです。この「ツロの地方」というのは、異邦人が住む地方です。なぜかと言うと、「**だれにも知られたくないと思っておられた**」からです。イエス・キリストは、この地方の「**家に入って**」、人々から身を「**隠された**」のです。

クリスチャンの方は、イエス・キリストのこの姿に少し驚かれるかもしれません。イエス・キリストにも誰にも知られたくない時がある、人々から隠れていたい時もある、その姿に少し意外な感じを抱くかもしれません。私たちはいつの間にか、イエス・キリストはいつでもどこでもどんな人にも笑顔で対応し、自分の身を削って喜んで自分を与え尽くしてくださる方だと思っています。しかしイエス・キリストもご自身を隠される時があるのです。それは、神様にもご自身を隠される時があるということでもあります。

私たちは、何か悩みや問題を抱えると祈ります。「祈り」というのは、クリスチャンの方でもクリスチャンではない方でも行なう、人間にとって普遍的なものです。私たち人間は、何か悩みや問題を抱える時、人間の力を超えた目に見えない存在に「神様」と呼びかけ、「助けてください!」「守ってください!」と呼びかけるものです。

しかしその時に、必ずしも祈りがすぐに聞かれるわけではない、祈りがすぐに答えられるわけではない、そういう経験が私たちにはよくあります。神様がご自身を隠されている

のではないか、私たちから隠れているのではないか、だから祈りが聞かれないのではないか、そう思える時がよくあります。

2. 幼い娘が悪霊につかれていた女

今日ご紹介したい「シリア・フェニキヤ生まれ」の「ギリシア人」の女性も、ある意味で一つの祈りを持っていたのです。その祈りを抱えて、隠れているイエス・キリストのもとにやって来たのです。彼女の祈り、願いは、「**自分の娘から悪霊を追い出してほしい**」というものでした。彼女にはまだ幼い女の子がいたのです。その子が悪霊につかれている、具体的にどんな状態であったのか分かりません。しかし、とにかく幼い娘が苦しんでいる、その苦しんでいる娘を見ている自分も苦しい、どうにかしてやりたいけれどどうにもできない、イエス・キリストの噂を聞いてこの方なら何とかしてくれるかもしれないと思った、そこで隠れているイエス・キリストを捜し当てて、祈るような思いでイエス・キリストのもとにやって来たのです。そしてイエス・キリストの「**足もとにひれ伏して**」、娘を助けてくださるように願ったのです。

私たちにとっても、自分の家族の問題は切実です。私たちの自分の両親や伴侶、子どもの問題を抱えた時には、悩み苦しみます。そしてどうにもできない問題の時には、神様に祈ります。「助けてください」「守ってください」「導いてください」と真剣に祈ります。おそらくこの女性も、切実な思いでイエス・キリストに真剣に願ったのだと思います。

3. 女の願いを断るイエス

しかし、イエス・キリストはまたも私たちの期待を裏切る意外な対応をされます。イエス・キリストは、切実な思いで「娘を助けてほしい」と真剣に願った女性に対して、このように言われます。「**まず子どもたちを満腹にさせなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです**」。イエス・キリストはここで、ユダヤ人を「子ども」と表現し、異邦人を「小犬」と表現します。つまりイエス・キリストは、自分はまずユダヤ人の病気の人や困っている人を助けなければならない、だから今は異邦人のあなたを助けることはできないと言われるのです。

イエス・キリストは隠れるだけではなく、切実な思いで真剣に助けを求める人の祈りと願いを聞かれない時もあるのです。やはり私たちは、このイエス・キリストの姿に少なからずショックを受けるのではないのでしょうか。イエス・キリストは愛の人で、弱さを持つ人に寄り添われる方、自分の身を削って人に与え尽くす方だと思っているからです。

私たちがもしこの女性の立場だったらどうでしょうか。切実な思いで家族の問題をイエス・キリストに打ち明ける、そして「助けてください」と真剣に祈り求める、しかしイエス・キリストは隠れておられる、祈りを聞いてくださらない、そして私たちを「子ども」ではなく「犬」呼ばわりする、もし私たちがイエス・キリストにこんな扱いをされたら、怒って帰ってしまうのではないのでしょうか。あなたなんて神でも救い主でも何でもない！

と罵って、イエス・キリストから離れて行ってしまおうのではないのでしょうか。信仰なんてバカバカしい、神なんていない、信じられるのは自分だけだと言って、信仰さえも捨ててしまおうのではないのでしょうか。

3. 食卓の下の小犬でも、パン屑はいただきます

しかしこの女性は、イエス・キリストがいくら隠れていても探し出し、いくら祈りや願いが聞かれなくても、信仰を捨てずイエス・キリストのもとから離れませんでした。彼女はイエス・キリストにこう言います。「**主よ。食卓の下の小犬でも、子どもたちのパン屑はいただきます**」。

まず彼女は、イエス・キリストを「主」と呼びます。「主」というのは、「神」ということです。彼女は、イエス・キリストがどんなに隠れても、どんなに祈りを聞いてくれなくても、イエス・キリストを「神」と呼び信じ続けたのです。人々から隠れていて、祈りも聞いてくれないあなたなんて神ではない、とは言わずに、あくまでもイエス・キリストを神と信じ続けたのです。

第二に彼女は、自分を小犬だと認めたのです。彼女は決して、自分を犬呼ばわりするなんて失礼だと怒り出したりしませんでした。彼女は自分を小犬だと認め、確かに自分はイエス・キリストの恵みを頂けるような存在ではないと認めたのです。彼女は異邦人で、イエス・キリストの恵みはまずユダヤ人に及ぶ、そのことを「不公平だ」と怒ることもなく、それを素直に受け入れたのです。彼女は、イエス・キリストの前における自分の姿を素直に認め、受け入れたのです。自分には、イエス・キリストの恵みを当然受ける権利がある、それを与えてくれないあなたは不公平だと、イエス・キリストに不平不満をぶつけることもしなかったのです。

しかし彼女は、それを認めつつも、なおイエス・キリストの恵みを期待したのです。「わかっています、私があなたの恵みに与かる当然の権利などないことはわかっています、しかしそれでもわずかで良いからあなたの恵みに与けれないのでしょうか。あなたの恵みはそんなに小さなものではないはずで、食卓の下にもこぼれてくるほど、大きく豊かなもののはずで、あなたの恵みはユダヤ人にだけ留まるほど小さなものでないはずで、異邦人にも及ぶ、いや全世界をも包むほど大きく豊かなもののはずで」と言って、イエス・キリストの恵みの豊かさと大きさを信じたのです。

イエス・キリストは、マタイの福音書の同じ出来事が書かれている箇所、彼女の信仰を見てこう言われます。「**あなたの信仰は立派です**」(マタイ 15:28)。イエス・キリストは、彼女の信仰に驚きました。そしてその信仰のゆえに、彼女の祈りと願いを聞き、彼女の幼い娘から悪霊を追い出されたのです。

おわりに

私たちは今日の聖書箇所を通して何を教えられるのでしょうか。私たちにも彼女と同じよ

うに様々な悩みや問題があります。自分の力ではどうすることもできない問題があります。その時に彼女は、イエス・キリストのもとに行きました。そしてイエス・キリストに祈り、願ったのです。なぜならイエス・キリストこそ、真の神だと信じたからです。

私たちの国では、八百万の神がいると信じられています。しかし聖書は、イエス・キリストこそ唯一の真の神であると教えています。イエス・キリストは確かに 2,000 年前に地上におられ、十字架の上で死なれました。しかし三日目に死からよみがえり、ご自身が神の子であることを示されました。そして今は天に昇り、私たちのためにとりなしてくださっています。

イエス・キリストは今もなお、真の神として私たちの祈りと願いを聞いてくださる方です。しかしイエス・キリストは、いつでもどこでもすぐに私たちの祈りと願いを聞いてくださるわけではありません。時にはご自身の姿を隠し、なかなか祈りを聞いてくださらない時もあります。

そのような時に私たちは、今日の聖書箇所に出てくる彼女の姿を、彼女の信仰を思い出したいのです。彼女は、祈りがすぐに聞かれないからと言って、イエス・キリストを神と信じることを止めたりしませんでした。イエス・キリストに不平不満を言って、イエス・キリストから離れてしまうこともありませんでした。彼女は、あくまでもイエス・キリストを神と信じ続け、イエス・キリストの前における自分の姿を受け入れました。自分には、イエス・キリストの恵みを受ける当然の権利があるなどとは考えませんでした。しかしそれでも、イエス・キリストの恵みは決して小さくなく、こんな自分にも及ぶほど豊かで大きなものだと思じたのです。

イエス・キリストは確かに、私たちのために命を捨てて十字架に架かり、私たちにその愛を示してくださいました。イエス・キリストの愛は、私たちの罪よりも遥かに大きいのです。私たちの人生を振り返る時、胸を張って神を愛し、人を愛してきたと言えるでしょうか。私たちの人生の多くは、自己中心であったように思います。私たちは、唯一の真の神であるイエス・キリストの恵みを当然受ける権利があると、胸を張って言えるような人生を歩んできたでしょうか。

私たちの祈りと願いが聞かれない、その時こそ立ち止まって自分の人生と信仰を、もう一度振り返る時なのかもしれません。その時にこそ、彼女のように唯一の真の神であるイエス・キリストの前にひれ伏して、心から礼拝することが求められているのではないのでしょうか。そしてその時にこそ、イエス・キリストの前における自分の姿が見えて来るのではないのでしょうか。そしてその時にこそ、あの十字架で私たちに示されたイエス・キリストの愛を大胆に信じる信仰が与えられてくるのではないのでしょうか。

イエス・キリストを心から礼拝し、イエス・キリストの前にへりくだり、その愛と恵みをひたすら信じて待つ、その時にこそイエス・キリストは、御自身の御業を豊かに現わしてくださるのではないのでしょうか。